

平成30年度第2回

松本市総合教育会議会議録

松本市教育委員会

平成30年度第2回松本市総合教育会議会議録

平成30年度第2回松本市総合教育会議が平成30年11月27日午後3時00分市役所第一応接室に招集された。

平成30年11月27日（火）

議 事 日 程

平成30年11月27日午後3時00分開議

- 1 開 会
- 2 あいさつ
- 3 懇談
「子どもとスマホについて」
- 4 閉会

〔構成委員〕

市	長	菅	谷	昭		
教	育	長	赤	羽	郁	夫
教育長職務代理者		市	川	莊	一	
委	員	花	村	潔		
	〃	福	島	智	子	
	〃	山	田	幸	江	

〔情報提供者〕

医療法人 如水会鈴木眼科吉小路院長	鈴木	武	敏
教育政策課 教育文化センター指導主事	百	瀬	稔

〔事務局構成員〕

総	務	部	長	丸	山	貴	史			
行	政	管	理	長	中	野	嘉	勝		
地	域	づ	く	り	部	長	守	屋	千	秋
地	域	づ	く	り	課	長	西	澤	広	幸
健	康	福	祉	部	長	樋	口	浩		
福	祉	計	画	課	長	横	内	俊	哉	
健	康	づ	く	り	課	長	林	裕	子	
こ	ど	も	部	長	伊	佐	治	裕	子	
こ	ど	も	育	成	課	長	青	木	直	美
教	育	部	長	矢	久	保	学			
学	校	教	育	課	長	麻	田	仁	郎	
学	校	指	導	課	長	横	田	則	雄	

〔事務局〕

教育政策課長	小林	伸	一
教育政策課			
教育政策担当係長	堀	敬	子

《開会宣言》 午後3時00分

教育政策課長は平成30年度第2回松本市総合教育会議の開会を宣言した。

小林教育政策課長 ただいまから「平成30年度第2回松本市総合教育会議」を開催いたします。私は教育政策課長の小林と申します。議事に入るまでの間、進行を務めさせていただきますのでお願いいたします。

本日の会議はお手元の次第をもとに進行いたします。最初にこの会議の主催者である菅谷市長からご挨拶をお願いいたします。

菅谷市長 お疲れさまです。それでは、会議開催に当たりまして、一言ご挨拶を申しあげます。

本日は暖かい気候でございますが、このところまさに寒さが日増しに厳しくなっております。1年が過ぎるのは早いものでして、今週末は12月1日ということで1年の締めくくりとなる師走を迎えることとなります。そんなお忙しい時期にもかかわらず、赤羽教育長を初めといたしまして各教育委員の皆様方には、平成30年度の第2回目となります総合教育会議に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

また、本日は岩手県奥州市で眼科医院を開業されておられます鈴木武敏先生に遠路はるばるお越しいただきまして、心から感謝申しあげます。また、先ほどはご講演いただきありがとうございました。

今年5月の総合教育会議におきましては、「これからの学校教育のあり方を考える」をテーマに教育委員の皆様から一人ひとりに対応できる教育の必要性や、一度失敗してもやり直しができる教育などのご意見を賜りました。そして、特に人口減少が顕著な山間地域における特色ある学校づくりについてのご提言をいただき、学校づくりとまちづくりを一体的に進める取組みが少しずつ動き始めております。

さて、現在、松本市では健康寿命延伸都市・松本の総仕上げといたしまして、生きがいの仕組みづくりに取り組んでいるところであります。今後、超少子高齢型の人口減少社会を初めとした、ICTやAIロボットの技術的な進歩等により、社会が大きく変化していく中におきましても社会に流されることなく自らが主体となって自分らしく生きがいをもって暮らし

を創造していくことが重要ではないかと考えております。そして、その流れを特に社会の変化に対して適格に順応できる生きる力を持った子どもや若者を育てていくことが必要不可欠であると認識しております。そのため、本市として具体的には若者と家庭に対する教育を重要な柱としながらキッズアンドユース、子どもと若者の事業を一層強力な形で取り組んでまいりたいと思っております。

本日の懇談項目といたしました「子どもとスマホについて」も、その一環として位置づけるものです。私はスマホにつきましては、初歩の段階で使い方を間違えると、子どもの健康やまた心身の発達に大きな禍根を残す深刻な問題であると危惧しておりまして、そのような意味では今日の我が国におけるスマホの危険性に対する社会の認識は不十分であると考えております。

そこで本日は、鈴木武敏先生をお迎えいたしまして、スマホの危険性につきまして医学的な立場から情報提供をいただき、子どもとスマホについて真剣に考えていきたいと思っております。私といたしましては、本日の結果を踏まえまして、松本市からスマホの適切な使い方などを、市民はもとより全国に向けて発信していきたいと考えております。教育委員の皆様におかれましては、それぞれの立場から余り形式にとらわれずご発言をしていただき、自由闊達な意見交換ができることを望みまして挨拶といたします。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

小林教育政策課長 ありがとうございます。続きまして、赤羽教育長からご挨拶をお願いいたします。

赤羽教育長 第2回の総合教育会議の開催に当たりまして、教育委員会を代表してご挨拶を申し上げます。

まずはお忙しい中、遠方よりお越しいただきました、鈴木武敏先生に重ねて御礼を申し上げます。ありがとうございます。

ただいま菅谷市長のご挨拶にもありましたが、本年度第1回の総合教育会議では少子化に伴い、「人口減少を乗り越える特色ある学校づくりへの挑戦」と題して、教育委員会から提案をさせていただきました。これまで地域づくり部とともに奈川・安曇地区で地域の皆さんの声をお聞きしてま

いりましたが、改めて学校の存続には地域づくりとの関わりが不可欠であり、今後も一層連携を図ってまいりたいと思っております。

さて、今回テーマといたしました「子どもとスマホについて」ですが、本年6月に市内小学校3年生以上それから中学生の悉皆調査をいたしました。電子メディア機器等に関するアンケートの調査結果で自分専用、もしくは自分と親との共有も含めて使えるという子どもたちは中学生で約72%、小学校3年生でも53%という非常に高い結果となりました。また、大阪府では6月の大阪北部地震を受け、早ければ来年春にも公立小中学校で学校にスマホを持ち込めるというような報道あり、今後、子どもたちのスマホ所有率はますます低年齢化していくのではないかと、また所持率も上昇していく傾向がより強まるのではないかと危惧しているところでもあります。スマホは私たちの生活を本当に便利で豊かにしてくれる道具ではありますが、子どもたちへの危険性や体への影響をきちんと理解して使っている方はまだ少ない現実があると思っております。

本日のこの会議をきっかけに松本市からスマホが子どもに与える影響やまた適切な使い方等について全国に発信し、未来を担う子どもたちの健やかな育ちへの取組みにつなげていければと思っておりますので、本日はどうぞよろしく願いいたします。

小林教育政策課長 それでは早速、懇談に入ります。

それでは、菅谷市長、進行をよろしく願いいたします。

菅谷市長 それでは、私の方で会の進行をいたします。座ったまま失礼いたします。よろしく願いいたします。

懇談のテーマは先ほど申しあげましたが、「子どもとスマホについて」でございます。

それでは早速ですが、鈴木先生から「脳と心までむしばむスマホの怖さ」についてお話をいただきます。よろしくお願いいたします。

鈴木武敏先生 座ったままで失礼します。スマホの普及率は奥州市でも恐ろしく高くなっています。実は、スマホの問題をはっきりさせるためには使用しない子どもたちと使用している子どもたちを調べたいのですが、高校生ではほとんど不可能です。というのは、スマホ使用時間ゼロという子は5、6人し

かいません。ですから、今度の神経眼科学会でスマホの抑制の話をするのですが、対照がないと言われているのです。本当に困っていて、それで今、奥州市の教育委員会に依頼し、今年の調査で中学生の2割は使っていないことが分かりました。それでも2割です。今を逃してしまうとこの問題をはっきりすることはできないので、年明けにでも再度専門の先生と協力し調査してみようかと考えていますが、もしよろしければ松本市でもお願いしたいと思っています。ただし、3カ月ほどかかる検査をしなければならぬため、とても時間がかかります。

スマホの問題を語るとき、「視機能の発達時期の子どもたち」と「完成した子どもたち」という2つの世代に分けなければなりません。ですから、患者さんを見ていると3歳、2歳の子どもがスマホをあやしてもらっている、つまりお母さんが診察をしている間の時間潰しとして見ている状態で、これはとても恐ろしいと思いました。まだ両眼視も完成していない時期に抑制が起きるものを子どもたちに預けていいのでしょうか。欧米では「小学校まではスマホは持たせない方がいいだろう」という傾向・指導の方向に行っているようで、日本でも早くお母さん方にどのような問題が起きるのかを伝えなければならないのですが、なかなか伝える機会がありません。マスコミもやっと最近取り上げるようになって、私も幾つか頼まれて投稿していますが、まだまだ一般の人にはスマホの害は伝わっていないと感じています。いいことしか見ていないのです。勉強に使うという答えがありますが、子どもたちは勉強に使っているわけではなく、SNSやLINEの使用が増えています。高校生などはほとんどがそうです。ですから、本当の友達ができなくなっていて、これは問題だと思います。また、先程の講演会でもお話しましたが、両眼視が壊れて遠近感などの脳の発達が低下した人がそのまま大人になったときに、将来の高齢化社会の中でどのようなことになるのだろうかという点を非常に心配しています。立体視が悪いと高齢者の施設では転倒が増えます。実は適切な眼鏡をしているだけで転倒率が落ちてきて10倍以上違うのです。スマホをやっている大人の人が来たときの眼鏡合わせは簡単ではありません。異常であることを見つけずに合わせてしまい嘘の眼鏡を処方してしまうことが最近特に増えている

ことは問題で、検眼問題も含めて本当は眼科医がもう少しこのスマホの問題に取り組まなければならないのですが、悲しいことにこのスマホの問題を取り上げている人は10人程しかいないと思います。そのせいで私がいろいろなところと呼ばれるという格好になっています。ただ、小児科の先生方はさまざまな小児科の学会などでお話をしてすごく関心を持ってくださっているのです、これからだと思っています。何らかの規制は必要なのかなと思いますし、これから不可欠なものであることは間違いありません。けれども、使い方は早いうちから、つまり健康以外の危険性については頻繁に言われていますが、それよりも脳への影響をもっと強調して親に話していかなければなりません。また、問診をしていると家族関係が壊れているなという家庭でこのようなことが増えていますから、こういった点にも診療をしながら関心を持っていかなければいけないと感じております。ですから、先ほども申しあげたとおり、親の依存症が意外と問題にされていないのです。スマホ問題に取り組んでいる先生方は「問題は子どもではなく親だよ」と言いますし、私も最近はそう思っています。特に、「箸を投げられてささった子どもが来た」というのを見ていると問題は親であると思います。親が無視をするから子どももスマホに依存するのです。ですから、「スマホによるネグレクト」というように「育児ネグレクトが増えている」と最近は表現しています。このようなことがあり、何とかして欲しいなと思っています。やはり啓発が必要です。

菅谷市長

ありがとうございました。先生はスマホのことにに関して日本では非常に高名な方で、今のお話は眼科医としての医学的なものから脳の発育の問題やさらには家族関係まで、スマホ中毒や依存など、非常に多岐に亘るものでしたが、このようなことを今日の教育委員の皆様には参考にしていただきながら、それぞれの立場からスマホに関連してのご発言をいただきたいと思っています。今日まとめるというのは大変難しいですが、一つの方向性が出ればと思っています。この間、新聞紙上の討論で「スマホの功罪」ということでいい点と問題が出ていましたが、結論としては正解の見えにくい問題ということで、要するにスマホのメリットを強調する人は賛成論者ですし、デメリットを強調すれば反対論者となります。そういった中でメデ

ィア関係者というのは、例えば子どもがスマホを使うことは大事だという賛成の立場の場合、その理由として「これからは時代に必要な能力というのは情報、通信、技術、ICTを使いこなす力で、ある意味では時代を生き抜く最初の一歩だから」というような表現をしています。賛成の方からすると、一概に禁止するのではなくて、先ほど鈴木先生もおっしゃっていましたが「適切な使い方を教えるようにする方が建設的ではないですか」というようなご意見であると思われます。「自分たちでルールを決めたらどうか」というようなこともおっしゃっていました。

一方で反対派は先ほどもあった医療関係者、それから教育関係者の方々に、「乳幼児にもたらす悪影響を日本は軽く見過ぎているのではないか」「子どもの成長に対して悪い影響が出ていないか、常にそういう警戒心を持たなければならない」ということも言われていました。ただし、「子どもを育てる生活の中でも上手に使えばいいじゃないか」という意見もあり、例えば、健診日はいつであるか、あるいはまた、今日は花村さんがいらっしゃいますが、発疹が出ているようなときや子どもが痙攣を起こしたときに動画を撮るなどといった使い方があり、ドクターが見れば有意義ではあります。しかし全般としては小さいうちにスマホを使うのは問題があるということも掲げていました。私はこの間新聞で見ただけなのですが、このようなことがありましたので、これから具体的な話が出ると思いますから少しお聞かせいただけたらと思います。

それでは、次に「市内小中学校の電子メディア機器等に関するアンケート調査結果について」教育文化センター百瀬指導主事説明をお願いいたします。

百瀬指導主事 教育文化センター百瀬です。よろしくお願いします。

それでは、6月にとったアンケートの結果ですが、資料2ページ目から各種結果が出ていますのでお伝えしたいと思います。

小学校3年生から中学校3年生までを対象にしたアンケートですが、濃い網掛けの部分が自分専用の端末、つまり自分専用のスマホや携帯を持っている児童生徒になります。3年生を例にとると16%の児童が該当します。次のページになりますが、中学生3年生になると47%になりますの

ではほぼ半分の生徒が自分専用の機械、スマホ、携帯を持っているということになります。3ページにあるとおり、実際によく使うものとして、小学生では動画やゲーム関係が多いです。同じように中学生で見ると、動画と、先ほどの鈴木先生のお話の中にもありましたが、LINEやSNSを使用しているという割合が非常に高くなってきます。資料の4ページ、5ページになりますが、実際に子どもたちがインターネットに接続するのはスマホばかりではなくゲーム機からも接続しており、ゲーム機も小型化されていますのでかなり小さい画面で接続していることが伺えますし、中学生になりますと自分専用の機械を持っていますので、そちらを使ってインターネットの世界へ飛び出しているということになります。

実際の使用時間ですが、小学生は平日平均1時間程度です。休日はその2倍になりますのでおよそ2時間程度となります。テレビの視聴時間を除いてアンケートをとっていますので、純粋にゲームやスマホに向かい合っている時間が小学生は平日1時間、休日は2時間ほどになるということです。中学生になると平日は1.5時間、休日はその2倍の3時間ということになり、かなり多くの時間を使っていると思われれます。調査をしてみると、1日5時間以上使っている児童や生徒もかなり多く見受けられました。実際に子どもたちもそのあたりは感じていまして、「実際に生活は変わったか」という項目においては「次第に使用時間が長くなってきている」と感じている児童生徒は学年を追うごとに多くなっています。使用時間が長くなった分、何かを削らなければなりません、それは何かと言うと勉強時間と睡眠時間です。私の方で、4月に行われた全国学力テストとの相関をとってみました。上位校、下位校という言い方でよいかわかりませんが、余り成績のよくなかった(点数が余りとれなかった)学校ほど個人端末の所有率が高いという結果が出ました。また、使用時間も下位校のほうが長くなっていたので、先ほどの鈴木先生のお話にもあったとおり、学力との関係がかなり大きいのではないかとということが考えられます。したがって、学習時間や睡眠時間を削って生活リズムを崩しながらスマホと向き合っている時間が長くなってきているので、このような結果がおのずと出てしまうのかなと感じました。

このページ以降は参考資料になりますが、ルールを守っているか、将来になりたい職業は何かということで、将来になりたい職業についてはユーザーが挙がっていたりしますので、どれぐらいの意識があるのかという点での予備調査と思ってご覧ください。

私からは以上になります。

菅谷市長 ありがとうございます。学業にも影響するというので、成績や睡眠時間とスマホの関係性が出ています。

それでは、赤羽教育長をお願いします。

赤羽教育長 先ほど、鈴木先生に1時間講演をいただき、今もまたそれに加えて話をいただきましたし、百瀬指導主事からも説明をいただきました。

私からは、初めに今日のテーマに関わって、近年、教育委員会が取り組んできたことの概要や課題意識について少しお話をさせていただきます。

私どもは昨年来、メディアの発達や幼児期の子どもたちの過ごし方において、親子の愛着形成が十分でないのではないかと感じています。そのため発達障害と同様の様相を示す子どもたちが増えているのではないかと問題意識を持ち、昨年は第2回の総合教育会議で「愛着の形成を考える」と題して懇談をさせていただきました。特に、スマートフォンなどの普及によって、子どもも大人もゲーム等に夢中になって親子の触れ合いというのが急速に減っているのではないかと危機感を持ち、今年度は「地区の皆さんと語る会」を年2回開催し、「子どもとメディアとの関わり方について」をテーマに懇談させていただきました。これは、昨年、神林地区で開催する際に地域の皆さんから、「是非、スマホのことについてテーマを絞って話をしたい」というお話があり、懇談をさせていただきました。本日のように百瀬指導主事から「市内小中学校の電子メディア機器等に関するアンケート調査結果」について説明をした後、小グループに分かれて各家庭の現状や悩み、約束事や親の方針等について参加者全員から発言をしていただき、他の家庭の現状や考え方、スマホの危険性、最終的には親任せあるいは家庭任せになっている現状が次第に明らかになっていき、「これは何とかしなくてはいけない」という問題意識が多く寄せられました。私のグループにいたお母さんは、「実は、私がゲーム依存にな

ってしまった。初めは子どものゲームを注意していたのですが、それをも自分もやってみたら面白くなってしまい、子どもより親の方が依存になってしまった状態です」と正直にお話をしてくださいました。

本年度も10月に城東地区で「子どもとメディアとの関わり方について」懇談を行いました。子どもの成長を考えたときにスマホを含めたメディアとのつき合い方というのは見過ごせない問題だという共通認識は持てましたが、一方で両地区とも危険性については一定の認識は持ちつつも、そこからどうするかという次の一手がなかなか出てこないという現状がありました。

また学校でも、これまでメディアリテラシー教育の中で各学校に出向き親子も含めて取り組んできていますが、最終的には家庭に委ねるため、やはり手詰まり感があるといいます。しかし現実では、いわゆるスマホ等のSNSやLINEを含めた問題が多く起こり、起こってしまったことに対して学校が後追いの形で指導や調整をしていくという、まさに後手の対応に追われているという状況があります。

今まではいじめなど生徒指導的な視点からこのスマホ等を考えてきましたが、今年になって市長から資料提供をいただいたことをきっかけに、鈴木先生のお話のとおり、今まで私どもが全く考えていなかった視点が新たに加わったことで、さらに幅広い問題・課題になってきたと思っています。

本日は、先ほども鈴木先生から「これは子どもの問題だけではなく大人の問題も大きい」というようなお話もありましたが、大人も子どもも本当にどう向き合っていったらよいか迷いと不安の中にながら大人も子どもも依存傾向がより強まっているのではないかと思います。

本日は、是非、次の一手を皆さんで考え合っていければと思っています。

菅谷市長

ありがとうございました。

花村先生、スマホによる育児といった視点で、日々の診療待合室やお母さんの現状等も含めて何かお話いただけますでしょうか。

花村委員

そうですね、鈴木先生から小中学校の子どもたちとスマホとの関係をより分かりやすくご説明いただいて、なるほどと思いました。というのも、

以前から学校健康診断の際に視力検査がありますが、スマホのことが言われ始めた4、5年前でしょうか。先生の言われる片眼視、つまり視力の健康診断の結果を分析して見ていると、例えば片方が0.7、もう片方が1.5あるような子が目立つようになったのです。「何だかおかしいな、なぜだろう」と思い、前回の定例教育委員会でも「健康診断で片方の目の視力が落ちている子が目立つから、その子を重点的に調べた方がいいね」という話を少しさせていただきました。それが、本日の先生のお話で結びついたような気がします。

それから私も職業上、待合室でお母さんと子どもとの関係をしばしば見ることがあります。私は、保育園に通う子ども、それから小さい赤ちゃんを多く診療しますが、そういった子どもたちが待合室で待っている時間に騒ぎ出すと、お母さんは皆スマホを出してそれをおもちゃ代わりに見せています。それならいいのですが、子どもが泣こうが暴れて遊んでいようが、人に迷惑をかけようが、お母さんは知らん顔で一生懸命スマホをやっているのです。このような関係はどうなのかと思います。これは、社会学者である明治大学のある先生が『スマホを見ないで僕の顔を見て』という本の中で、「赤ちゃんは泣く理由によって泣き方がそれぞれ違います。お母さんはその泣き方から子どもがどのようなことを欲しているか判断しなくてはいけません」と言っています。しかし、待合室では子どもが泣こうが暴れようが知らん顔でずっとスマホを見ているのです。そういうお母さんがたまたま目につくと、診療室に入室してきたときに「今、何をやってたの」といじめるのです。その社会学者の研究で発表されたことは、「三つ子の魂…」という言葉がありますが、このころお母さんからそういった状態で育てられた子どもというのは、愛着障害になっている傾向が強く、発達障害の子どもと似ています。そういった子どもが将来小学校に入学したときに、極端に言えば学級崩壊の火種になるようです。こういったことが統計的に次第に明らかになると、本当にはっきりすると思います。

それから、「小中学生がスマホ依存でどうしようもない」という相談に見える方がいらっしゃるのですが、諭して諭して、何カ月か様子を見て全く改善のない場合は強制的に入院させます。入院先は知っている先生にお願

いして、親子に一切スマホを使わせないといった強制手段を取ります。そういう経験もあります。

今のこうした状態を考えると子どもには責任がないような気がします。ですからこの状態をいい方向にもっていくには、鈴木先生も菅谷市長もおっしゃったように親が一番中心的な役割をしているような気がしてなりません。ですので、3歳未満の親のスマホに対する感覚的な教育を早期に行っていないと、小学校や中学校でそれが段階的に重症化してくるような気がしてなりません。片眼視になるとどうしても距離感が分からなくなります。小学校も中学校もそうですが、怪我が多いのです。距離感が分からないと、手を着いた方がいいのか、それとももう少し後がいいのかということが感覚的に分からなくなるので、それによって怪我が増えるのではないのでしょうか。まだはっきりしたデータは出ていませんが、薄々そう思っています。こういった点でもスマホというのは、ある意味子どもにとっては公害なのではないかと思います。

ですので、これからの方針とすれば、幼少期の子どもを持つ親の教育、つまりスマホに対する危険性を徹底的に大人に教育する必要があると思います。その点について、こども部の部長さんがいらっしゃるのでお願いしたいのは、出前講座に「子育て支援講座」があり「子どもが急病になったときの対応法」等についてを松本市小児科・内科夜間急病センターの看護師が講師をしているのですが、講座が年々減ってきているような気がします。そういった機会を取りあげて、今までは疾病が主で、予防接種の質問がほとんどでしたが、ここでスマホの教育も兼ねてやっていけば、少しはいいのかなと思っています。以上です。

菅谷市長 はい、ありがとうございました。鈴木先生、今の花村先生のお話は、眼科的な立場からみてどうなのでしょう。

鈴木武敏先生 視力の左右差は目立ってきています。片目で見てみるとその目だけ負担がかかってピント合わせができなくなっているということで、片一方がAで片一方がCなどということがあります。この異常を消してから測定しなければならぬのですが、その点に対する理解がまだ十分でないので、それをそのまま測ると間違った眼鏡をかけることになります。異常を起こし

た目に合わせた眼鏡をすると正常な目の方には合わなくなってしまいます。すると更にひどくなり、悪循環に入ってしまう、直すのに1年以上かかる子どももいます。そういった子どもたちは、一般的な調節麻痺剤でとれません。とれないことを気づけない段階では間違った眼鏡でオーケーになってしまうのです。なので、そこも含めて調節麻痺剤を大人でもスマホをやっていたら使ってくださいと眼科学会でも言っていますが、眼科医はほとんど使っていません。スマホによって調節異常にどれだけひどいことが起きているのかはまだ理解されていません。

菅谷市長 鈴木先生、視機能というのは大体どの辺りで完成するのでしょうか。

鈴木武敏先生 立体視は3歳です。それでも、治療法によっては改善する年齢が6歳か7歳ですので、就学時健診が大事な最後の砦となります。本当は3歳児健診で見つけなければなりません。

花村委員 松本市は早くからそのことに気づかれて、今、視能訓練士さんをお願いしています。

鈴木武敏先生 視能訓練士がやるだけで全然違います。実は、私の講演を聞いた奥州市の市議会議員さんが、初めて視能訓練士の3歳児健診を実現させてくれました。すると、就学時健診の弱視がほとんどゼロになっていたといいます。ですので、3歳児健診で専門家が検査をするというのが絶対不可欠だと思っています。市の職員の中に視能訓練士はいないので、本当はきちんと設けて検査センターに常駐させるといいと思います。奥州市はうまくいきました。県立病院でも、視能訓練士という職種は国家資格なのにありませんので、臨時職員のような形で雇っていたりします。

花村委員 松本市は眼科の先生方をお願いをして、各眼科の先生方の所属している視能訓練士の方を毎回3歳児健診のときに派遣してもらいその都度やっているのです、非常に助かっています。

鈴木武敏先生 視力検査の仕方がおかしいと私はずっと言っていて、実は遠くの視力より近くの視力が大事なのです。遠方視力と近方視力の両方を測るべきなのにしていません。なぜかと言ったら、遠視の子どもは近くが見えないので、1.0や1.5あるからといって近くが見えるわけではないのです。視力が1.5ある子どもたちの約2%は近くが見えません。つまり本が読めな

いのです。成績が悪い子だと思ったら、実は遠視が強くて本が読めなかっただけという場合もあるので、眼科医会に対しても遠方視力をやめて近方視力を測ったらいいのではないかといいことを言っています。今、船橋市で私が2歳児でも測れるじゃんけんカードを用いた検査をやり始めることになっていますので、それだけで全然違います。また、「スポットビジョンスクリーナー」という度数をはかる検査があるのですが、これは不同視をかなり見つけることができるので、視能訓練士による検査ができないということであればスポットビジョンスクリーナーを導入して測定してもらえればかなりの不同視力や弱視になりやすい子どももチェックできると思っています。ただ問題は斜視を見つけないということなんです。この機械は、内斜視は見つけても外斜視は見つけないことができません。小児眼科学会がこの点を言っていないのはとても問題だと思います。

また余談ですが、プリントの6ページ目にスマホ使用時間と中学の成績、そしてLINE使用時間が書いてあります。先ほどLINEを使用している子どもほど成績が悪いというお話がありましたが、とても差が出るので驚きました。

菅谷市長 花村先生から、そして眼科的な問題を鈴木先生のお話をいただいたわけですが、それでは福島委員さん、どうでしょうか。

福島委員 私は、鈴木先生の話は何カ月か前に教育部長を通じてお聞きして、それからスマホの害というのはこれまで言われてきたものだけではないということをととても実感しました。

今、小学生の子どもがいるのですが、そのときからスマホにはなるべく触らせないようにになりました。だからといって何もさせないわけではなくiPadなどはさせていて、完全に遮断しているわけではありません。小中学生のスマホの利用に関しては、この間、松本市PTA連合会の10年史のようなものを見ていたら、10年ほど前から子どもとメディアの関わりについて啓発活動というのは始まってはいましたが、鈴木先生のお話のような視点とは全く異なっていました。今、それを振り返って考えたときに、私自身が10年前に乳幼児を持っていたわけですが、そのときにととても気軽に子守といますか、何か時間を潰したいときに子どもにスマホ

を見せていたということもあり、その時はこういった感覚、認識が全くなかったということをととても感じています。ですから、早い方が絶対にいいと思いますし、今回の先生のお話も本当はもっと沢山の方に聞いていただけるような場であったら良かったとも思っています。今は大学に勤めていますので大学生のことを考えてみると、大学生は授業中でも必ずスマホは机の上であって、大きな教室だと後ろの方に触っている子がいます。そういう子が全て依存かというとはそうではないと思うのですが、スマホがそばにないと落ちつかないということはきっとあるのだとは思っています。

本当に一部ですが、大学生の中にもオンラインなどのゲームにはまって学校生活ができない、学校に出て来なくなってしまうという例が実際にあって、社会生活が営めないほどにまでゲームに依存するという学生もいます。

私は社会学をやっているのですが、その領域でも今ゲーム依存がかなり議論されています。先生のお話でもありましたが、2018年6月にWHOがゲーム障害を認定して以来、そういった話題も結構取りあげられるようになりました。依存には物質的な依存と非物質的な行動依存というのがあり、行動依存で今障害として認定されているのがゲームとギャンブルだと言われています。ギャンブルというと遠い話のように聞こえるかもしれませんが、実は今、ギャンブルはほとんどゲーム化されていて、スロットマシンのようなもののギャンブル依存がアメリカやオーストラリアでは大きな問題になっていると言われています。

今日のお話にもあったように、依存のプロセスというのは脳の快感の回路が暴走することによって起こるということが解っていて、今喫緊の課題としてあげられているのが人間とマシン、つまりスマホなどマシンとの依存が大きな焦点として挙がってきています。

今、病気として認定されたからこそ個人の問題としてではなく、依存を起こさせる仕組み、つまりゲームもギャンブルも一部のヘビーユーザーから多額の儲けを得るという構図は一緒のようで、そういった依存を引き起こさせるようなものをどんどん配信している企業に対する規制に目を向けていかなければならない時代になってきていると感じています。

菅谷市長 最後はアディクション(依存、中毒)といいますか、お金を儲ける人たちというのは頭がいいと思います。今、インターネット依存やスマホ依存というのは急速に拡大しています。厚生労働省の発表で、今年の8月末時点で中高生の場合は全体の650万人、7人に1人が病的依存で、予備軍を含めると5人のうち2人が厚生労働省によると病気依存であるそうです。大変なことになっています。

眼科的な話で鈴木先生に一つだけお聞きしたいのですが、機器を使ってデータも出るのですが、脳に関しては前頭葉の色の問題が言われています。これはどうなのでしょう。

鈴木武敏先生 バランスが悪いなどといったことが徐々に出てきています。

菅谷市長 それはスマホ脳ということになるのでしょうか。

鈴木武敏先生 はい、大きさも関係するようです。iPadだとあまり眼科的な症状は出ないようなので、大きさが問題だと私は見えています。

菅谷市長 画面が大きい方がいいということですね。

鈴木武敏先生 距離がすごく関係するということを、この間大阪大学の教授に教わりました。30センチと20センチでは全く負担が変わってくるそうです。30センチで見ている子どもには外斜位はほとんど出ないのですが、20センチにしてしまうと両目で見られないため外斜位が一気に増えます。なので、その教授は両眼視やゲームの立体視の研究者で世界的に有名な方なのですが、その先生に提案しました。「スマホに30センチ近づいたら警告、画面が消えるようにしたらどうでしょうか。距離が変わるだけで全然違います。今はセンサーがありますから、30センチ近づいたら画面が消え、離さないといけなくなるようにしたらいいのではないですか」と言ったら、いいアイデアだと言っていました。

菅谷市長 親に隠れてよく子どもが夜に布団の中でスマホを使っていますが、距離も近くなるので持っただけではいけないわけですね。

鈴木武敏先生 そうですね。布団で見るときは、実はわざと片目にしています。枕で隠すと近い距離でも見えるのです。

菅谷市長 ますますおかしくなってしまうですね。

鈴木武敏先生 そうです。暗順応なども調べたら、絶対にスマホをやっている子はおか

しいだろうと思います。また、局所のERG検査【(網膜電図検査)は、網膜に強い光を当てその電位変化を記録、その波形から網膜の働きが正常かどうか調べる検査】を行うとどこがおかしくなっているかわかります。それも私の研究テーマになっています。

菅谷市長

では次に、山田委員さんいかがでしょうか。

山田委員

学校現場から離れて2、3年経ちますが、本当に子どもたちの状態が目まぐるしく変わってきているなということを実感します。

先ほど赤羽教育長がおっしゃったように、学校現場にいるときはメディアリテラシーという研修を、高学年を中心に保護者も交えて必ずやっていました。それはどちらかというと、「変なサイトに繋がらないように」「多額のお金をとられないように」など、危険であるということ子どもたちや保護者に話すことがほとんどで、保護者は3分の1の方が来て聞いてくれればいいかなというような状態でした。

先ほど鈴木先生がおっしゃったように、今は視力や子どもたちの行動、学習意欲などさまざまな面に少しずつ影響が出てきているなということ、非常に強く感じています。私個人的としては小学校1年生からの調査も必要だろうと思いますし、小学生にはスマホを持たせない、関わらせないような方向が必要かなと思います。

退職して今、中学生や小学生の子どもたちと一緒にいることがあるのですが、中学生は出会うと必ずスマホを出して、3人いても5人いてもみんなスマホを見て話をし、目は絶対にスマホから離しません。こういった状況で会話をしている子どもたちが沢山います。

児童センターに2年間勤めていて思ったことがあります。土曜日は児童センターで5時間過ごす子どももいますが、学校と違って時間割などの規制があまりないので、自由に使える時間が沢山あります。スマホはもちろん持って来ませんし使えない状態ですが、そういった状態でも子どもたちは好きな本選んで読んだり、友達と運動をしたり、庭へ出て遊んだり、将棋やかかるたなどのゲームで遊んだりして十分時間を使うことができます。土曜日は滞在時間が長いので1時間だけビデオを見せるのですが、たとえ古いビデオであっても子どもはとても一生懸命楽しんで見ること

ができています。ですから、この子どもたちは今スマホがなくても「これはだめだよ」と言えばそこで生活を楽しむことができるのではないかなというのを思いました。

ですので、本日の鈴木先生のお話をぜひ保護者に啓蒙、啓発という意味で聞かせていただき、保護者が脳や視力の問題について本気にならないといけないと思います。中学生からスマホを取り上げることは不可能ですが、小学生ならまだ間に合うのではないかと思いますので、規制とまではいなくても保護者に害についてしっかり話をし、5、6年生の子どもたちには「こういった使い方をするとこうなるよ」ということをきちんと話をしていきたいなと思います。しかし、それは学校だけでは難しいのではないかと感じていて、保育園や地域の会合、公民館活動や講演など幅広い場面でお話をしてもらわないとなかなか広がらないと思います。毎年メディアリテラシーについてさまざまな方に来ていただいてお話をさせていただいたにも関わらずこのような現状であることを考えると、方向性を考えなければならぬかなというのを非常に最近強く思います。

また、教育委員をさせていただいている中で学校訪問をできるだけ沢山しようと思って行っているのですが、不登校の子、発達障害の子、それから集団不適應なお子さんの増加が加速しているような気がしています。そして、その原因が保護者の方の対応の仕方であるということも最近増えているのではないかなと感じています。それが必ずしもスマホと関係するかどうかは分かりませんが、子どもたちが少しずつさまざまな害を受けているような気がして、「何とかしなければならぬ」ともがくような毎日です。

是非、本日のような具体的な話を幅広く話す場を増やしていきたいなと思います。

菅谷市長

ありがとうございました。山田先生も相当現場でご苦労されてきたのですね。不思議なのですが、なぜ眼科の先生方はわずかな方しか興味がないのでしょうか。鈴木先生に全国を回っていただくわけにはいきませんので、第2、第3の鈴木先生を育成しドクターや専門の方から話をしないと、おそらく親たちには響かず危機感を覚えなないと思います。

今度、保育園の保護者会の中で話をしようということで鈴木先生の話も含めて話すことになっています。なぜ私なのか聞いたら「医者だから」と言うのです。「医者だから聞いてくれる」と言うのです。賛否両論があることは仕方ありませんが、単なるメディアリテラシーではなく、健康に被害が及ぶと大変なことが起こると言うことを言う必要があります。今の眼科健診やスマホの問題、ブルーライトの問題、将来こういう子がどうなるのかといったことに加え、アディクション(依存、中毒)になっていずれはまた犯罪を起こすような子になるというような話もありますし、家庭内暴力などさまざまなことが出てきた場合そういった話までしないと分かってもらえません。こういった問題について本当によく考えないとはいけません、その辺りはいかがでしょうか。

鈴木武敏先生　私が講演に行くとともに反応がよく、仙台市泉区で行ったときも学校の先生方は大変驚かれたようでした。「今までのやり方だと詐欺にあう」「不適切なつき合いや交際といったお話しかしてもらえなかった」ということを話されていて、こういった話では保護者にさほど響かないです。けれども、私が話をすると、涙を流す方や自身の反省を書いてアンケートを出す方もいます。しかし思うのは、いつも「スマホで子どもたちが…」となるのですが、実は今、子どもたちは外で遊ぶことができません。近視の予防は外遊びなのですが、どこで遊べばいいのでしょうか。校庭を使わせてくれない今の状況を戻さなければなりません。子どもはどこでも遊んでいいと思いますし、言い過ぎかもしれませんが、道路でサッカーをして何が悪いのだらうと思います。ですので、そういった遊んでも怒られない場所を作ってあげることが必要ではないかと思います。外遊びだけが近視を減らすことは証明されていて、子どもの頃から外遊びをしているサッカー選手に近視の方はとても少ないのです。ブルーライトは禁止用語で、「ブルーライトや電磁波」という話に偏ると「ワクチン反対」のような話になるので、私はこれらの話は避け、外遊びの話をしています。夜にブルーライトを浴びてはいけないというだけなのです。

菅谷市長　そうですか。先生にはまた後ほどディスカッションの中へ入っていただきたいと思います。

それでは市川委員さん、どうぞ。

市川委員

また「スマホを使うとバカになる」という話で申しわけありません。前回も話をしましたが、「スマホを使うとバカになるのは本当か」という題目で、ルピナ中部工業ではスマホの無い日を作りました。「一日中頭を沢山回転させてください。連絡する大事なおもちゃはありません。それでも普通に仕事が出来たらおもしろいのではないのでしょうか。一日中、全社一丸となってよく遊んでください」ということで、その場で全員のスマホを取り上げてスタートを切りました。そしてその後「スマホのない1日はどうだったか」ということで、全技術者から事務員まで、自由な書式で正直な今の気持ちなど好きなことを書いて無記名で提出してもらいました。私がなぜ「バカになる」と言ったかといいますと、私は技術者だったものですから、全社員の現場を監督している技術者さんの知恵が落ちているといえますか、工夫や物づくりの会話に夢も創造もないということが何か技術者としてつまらないなど、自分の会社の社員とは違いますが私から見てつまらない人が増えてきたなということがありました。スマホを使って泥縄的にいつでも何でも、電話をすれば全て間に合ってしまうことで、技術者として先が読めなくなるという事態が見えてきたと感じ、実施してみました。下は入ったばかりで3,500円の修理をする20代の技術者から、上は大体1億円の現場を一人で監督・管理できる中堅以上の技術者までの範囲でアンケートを取ったのですが、その結果を大ざっぱにまとめてみました。すると「社会がスマホありきになっているからこれは絶対無理、スマホを取られてしまうと絶対無理だった」「不安になった」「なくても大丈夫、ただ無駄な時間が増えてきた」「今日は一日開放的な気分になって非常に良かった」という4つの感想が出ました。その割合としては、「社会がスマホ在りきになっているから絶対に無理です」が42%、「不安でたまらなかった、本当に不安だった」が25%で、この回答が大体20歳から40歳以下の技術者でした。一方で「なくても大丈夫、ただ無駄な時間が書き取らなければならない、または残しておかなければならないという時間が増えて、これは自分にとって現場監督の中では無駄な時間だった」が15%、「今日は本当に開放されて気分も爽やかだった」が18%で、

この回答は20代から30代にはほとんど見られず、45歳から65歳の社員が大半でした。つまり、若くなるにつれてスマホに依存している人が多くなっていて、我々のような年寄りには触れている機会もありませんでしたし、今言ったように3歳からスマホに関わる状況にもなかったものですから、このような結果が出てきたのかなと今は思っています。

先ほどお話した、技術者の先を読む能力が弱っているというのは、実際に私が現場を見たりでき上あがったものを見ているときに感じていることです。

今日、鈴木先生のお話をお聞きしましたが、その前に教育長からも先生の資料をもらっていて、なるほどと思いそのデータを今全社員に配りました。

先ほど山田先生がおっしゃったように、私も教育委員という立場になり学校へ行ってみると、学校にはさまざまな問題があり、先生の働き方改革が進められるなかでも不登校など先生の仕事が増えているのはなぜかと考え、いくつかお話を聞いていると「親が子どもと一緒にスマホに依存してしまっている」と感じてきました。そこで、その親を見ているのは誰かと考えてみると、我々企業なのです。技術者は社員である前に親なのです。ですから、企業のトップは社員を育てるときに彼らは親でもあるということを頭に入れなければならないと思います。先生にももらったものと同じようなものを「自分たちの子どもに見せなさい」ということで全社員に配り、「これは君たちが読むのではなく、家に帰って親や奥さん、家族で1回、どんなことがあっても会社の命令として読んでくれ」ということを話しました。その結果として今考えているのは、企業が教育というものに対し何かしら関わって一緒に親に向かっていくといいですか、会社・企業というのは親を預かっていますので、その親に向かっていくのが企業ではないのかなと感じています。

ですから、今日先生のお話を聞いたことでさらに私の話の説得力が上がるのではないかなと、大分言えることが増えましたので、「なかなかいいことを、すごいこと言うな」ということがまた相手を動かす力になると思います。

今日は非常にいい話を聞かせていただけたと思います。以上です。

菅谷市長

ありがとうございました。

ということは、市川さんところの会社はこれから更にこの方針に則っていくということでしょうか。

市川委員

今度は「一日中スマホから目を離すな」という機会を1度作り、どの程度困るのか、スマホはこんなに邪魔なのかと感じさせることも一つの方法かなと考えています。一度取り上げた以上、今度は一日中させるといいですか、徹底的に親にスマホを見させてよくないこと、疲れることを教えるのも一つかなとも思いました。

菅谷市長

大人の場合の眼科的問題はどのようなものですか。

鈴木武敏先生

子どもと同じです。大人の場合は、特発性斜視というのが増えているといます。それは恐らく、子どものころに少し斜視ぎみで眼鏡などで治った人が片目で見ると癖がつくので、突然発症してしまうというものです。

斜視というのは本来「調節性内斜視」というもので、スマホだから遠視の人が逆に斜視になると思ったら、海外の特発性斜視の人は近視なのです。今みんなで悩んでいるところですが、近視の人は近くで見ることができるために結局20センチといった距離で近づけて見るので、眼球が突然調節過剰になって内側にずれるのではないかと考えています。外斜視が現れなかったのがとても不思議だったのですが、ついにこの間現れたので、私の発想は間違っていないぞと思いました。今後、大人の斜視というのは手術するべきかどうかも含めて大きな問題になると思います。脳の勘違いでずれたものを手術して脳が勘違いから戻ったら逆だということです。すごく怖いなと思っています。

菅谷市長

脳の機能と今の目のことは、本当に繋がっているということで間違いな
いですか。

鈴木武敏先生

本来は脳がきちんとコントロールして左右均等に共同運動しています。ですので、私のこの発表から輻輳と開散の神経は別ではないかという話になり、今学会でも話題になってきています。私も共同研究者に加わっています。なので、今までの神経の支配がさらに複雑になるのではないのでしょうか。輻輳を休めば開散したと思っていたのが、開散は別なのではないか、

とうことです。

菅谷市長 脳機能の異常を起こす「スマホ脳」というのは、もともとは目からきているということを考えればいいのでしょうか。

鈴木武敏先生 そうです、目が支配する脳が勘違いを起こしているのです。

菅谷市長 そうなのですね。今、それぞれの委員さんからのお話が終わりまして、関心が深く深刻な問題になっているのだと感じていますが、赤羽教育長はこれまでのお話について学校教育の問題としてどうお考えですか。

赤羽教育長 今後ですが、先ほど、家族も含めて人間関係がなかなか作れない子どもたちが増えているというお話がありました。それが、例えば不登校やひきこもりといったさまざまな形で現れてきているのですが、先日学校訪問に行ったらこのような話を聞きました。「自分はコミュニケーションがうまくない、苦手だ」という意識を持っている子がスマホを持って、自分も何とかコミュニケーション能力をつけたいということで、いろいろな人と会話ができるアプリをインストールしていました。しかし、自分が「こんばんは」と挨拶をしたら、突然相手から名前を呼ばれて「俺たち友達だろう」と言われ、その後自分はどうしていいか困ってしまって思わずそれを切ってしまったと、ということでした。その後も何とかコミュニケーションをとろうと思い再度繋げてみたところ、今度は「LINE を始めよう」と相手から言われ、それも自分ではどうしていいか困ってしまい、また切ってしまったそうです。つまり、「自分に足りない能力をスマホに頼ってしまう」というところからスマホに入っていってしまう子もいるようです。けれどもその子は、「自分はコミュニケーションが足りないからアプリを通して何とか改善をしようと思ったけれどもなかなかうまくいかなくて、やっぱり先生や友達が安心だ」と言ってくれたそうです。ですので、子どもたちが先生や友達と学校で話をする方が安心して自分の本音を言えることをまず前提として、家庭でも親に本音を言うことができる、時には喧嘩をするかもしれないけれどそういった環境を作っていくことがとても大事なということを感じました。

鈴木先生のお話の中で、目と目を合わせることの大切さについてのお話がありましたが、実は今日、15年以上前に青山学院大学にいた佐伯先生

という方が書かれた「子どもの遊びで大切なこと、視線を合わせることの喜びの経験を」という小さいコラムをまとめたプリントを持ってきました。そこには「今までの遊びの概念は走り回ったり取っ組みあったりして、とにかく体を動かしてへトへトになるというものでしたが、近未来の遊びは大人も子どもも小さなゲーム機に夢中になり、今の若者の携帯電話でのメールのやりとりの姿が幼稚園でも見られる時代がすぐそこまで来ている。否が応でも電子機器と関わる時間が極めて長くなる時代になる。ここで失われるものは人と人とが目を合わせることだ」ということが言われています。15年以上前にこの先生が言われていたことがまさに現実になっているなということを今日改めて、鈴木先生のお話も含めて考えさせられました。

そこで、市長の方からもお話しがあったとおり、教育委員会でこれから何をどうしていくかということになります。1点目はこども部、それから健康福祉部とも連携して鈴木先生のお話を基にしながら、PTAの皆さんや地域の皆さん、市民の皆さんが活用できるようリーフレットを作成し、それをしっかり活用していきたいと考えています。

それから今、「子ども読書活動推進計画」を策定していますが、それに関連して是非、スマホ、読書、それから親子の愛着等も含めて標語や3行詩といったものを募集して、それを逆に発信をしていけるような取り組みをできたらと思っています。

また、鈴木先生の講演の最後でも学校文化祭の活用というお話がありましたが、いわゆる健康教育も含めて、松本市では「子どものころとからだの問題を考える～学校関係者と学校医のつどい～」を17回開催しており、毎年それぞれのテーマに沿ってみんなで話し合っています。医師会を通して学校医の皆さんとの連携も非常に進んでいますので、そういった素地のもとに是非、学校文化祭の活用を行っていったらと思います。また、その中にスマホをきちんと位置づけてできたらいいなと思います。特に中学校の学校文化祭は必ず行われていますので、どの中学校でも来年度から鈴木先生の資料を活用させていただきながら進めていけるように、現時点で3つのことを少しずつ来年度から取り組んでいきたいなと考

えています。

ただ、本日も話が出ましたが、保護者の皆さんに対しどこでどのように食い込んでいくかということは、PTA連合会の皆さんや青少年健全育成関係者の皆さんなど、多くの方たちと話し合いをしながら、また、こども部、健康福祉部とも連携をとりながら推し進めていけたらと思います。

菅谷市長

ありがとうございます。先ほど山田先生がおっしゃったように、メディアリテラシーのあり方を少し変えなければならないのではないかと思います。例えば、今まではどちらかと言えば悪いことに引き込まれるというような話ばかりしていましたが、そうでなく、スマホの問題というのはまさに今のようなことを話していかないとなかなか有効的にはならないですよ。それから、保育園の保護者の問題はどうでしょうか。

伊佐治こども部長

先ほど市長からもお話がありましたが、以前、鈴木先生から「3歳までに視機能が決定してしまうというのは子どもにとって深刻だ」というお話を伺い、その際さまざまな資料をいただきましたので、これについては保育園の保護者全員にお配りする保育園便りでお知らせしました。また、毎年1回、保育園の保護者会連盟の方と市長との懇談を行っております。これは役員との懇談ですが、スマホによる愛着障害については、過去2年にわたり市長から紹介していただいております。保護者の皆さんがそのことをとても深刻に捉えられ「あの話をもう少し広く全園の役員の皆さんを対象に市長から話をして欲しい」とお願いされ、鈴木先生の資料を活用させていただいて先日市長からお話をいただきました。70人ほどの保護者の皆さんがいらっしゃったのですが、本当に微動だにせず真剣に聴講されている感じで、おそらくとても深刻に捉えていただけたのではないかと思います。今後は、鈴木先生にご協力いただいて、とりあえず簡単なチラシを作成し全家庭に配布しようと思っています。その他にも主に子どもプラザなど乳幼児が多く訪れる施設での配布を考えています。

また先ほど親が問題だという話もありましたが、先日偶然、国の機関が平成29年度に小中学生を対象にした調査で、日本だけでなくアメリカ、中国、韓国を加えた4カ国を比較調査したものが載っていたので、それを

ネットでもう一回改めて見ましたが、今日のお話と重なるところがありました。「親とよく話をしている」のは、4カ国中、日本の子どもたちが最も多いという結果でした。また、「親とよくSNSで話をしている、コミュニケーションを図っている」のは日本の中学生が1位でした。しかし、ショックだったのは、「インターネットの危険性などについて親から注意を受けている」という点では最下位でしたし、先ほどのお話にも関係するのですが、「家族が同じ部屋にいてもそれぞれがスマートフォンを操作していて、家族団らんの場でもそれぞれでスマホを使っている」というのも4カ国中で一番高い結果でした。

先ほど山田先生が、「友達同士でスマホを持って話しているけれど目は合わせていない」というお話をされましたが、そういったことが家族の中でさえも起こっているのであれば、日本が危機的状況に陥っているのではないかと思いました。

今後、そういったことも含めながら教育委員会と連携していければと思います。

菅谷市長 小児科学会であれだけパンフレットを出していますが、広がっていかないのでしょうか。眼科ばかりではなく小児科にも、もう少し広がってもいいと思うのですが。こんな小さな町の中でこのようなことをやっていくというのは大変な問題ですよ。花村委員、小児科ではどうなのでしょう。

花村委員 私も広がっていいと思います。学会誌などから連絡は多く来ますが、どちらかというと流れてしまう傾向が強いです。少子化において子どもをどう育てるかということにお母さんは一生懸命で、どちらかというと普段の健康が一番だと思います。

どうしても子育ての方に関心が向いてしまって、スマホの使用に害があるということも非常に大事なのですが、どちらかという二の次になってしまっています。

菅谷市長 子どもを育てて芽が出ないと大変ことになりますね。目が悪いから。

花村委員 徹底的に保育園の頃から始めないといけませんね。

菅谷市長 鈴木先生には最後にまとめていただきますので、福島先生から何かありますでしょうか。

企業に対しあまりいい機械を作ってはいけないとは言えないでしょう。

福島委員

これからは企業の方が多分自主規制をすると思います。それは病気として定義されたということも大きいと思います。

菅谷市長

WHOですね。

福島委員

病気に定義されるということがかなりの圧力にはなってきます。

菅谷市長

なるほど、麻薬のようなものですからね。では、山田先生何かありますでしょうか。

山田先生

この鈴木先生の資料はとても分かりやすく、危機感を持てる資料でした。これからも子どもたちのいる場や小さいお子さんをお持ちのお母さんのいる場に行く機会がありますので、草の根レベルではありますが「いい話だったよ、こうだよ」と伝えていけたらなと思います。

菅谷市長

そうですね。市川委員さん、何かありますでしょうか。

市川委員

先ほど市長がおっしゃった「パンフレットをもっと広めよう」ということについて、私はこう思っています。教育委員会の方は教育委員会の方と付き合いと思えますし、私の場合、教育委員会に来るまでは建設業界にいましたから、建設業界の人としかつき合っていない。子どもは「大人に知らせて子どもにいく」というような考えですので、「大人がしっかり理解して子どもを見ていく」といったときに、子どもだけに配付しない、つまり教育委員会だけでなく建設部、商工部、それから商工観光部などさまざまな部署が一緒になって配布すると、見る人種が違います。なので、私はやるなら部門関係なくみんなでやった方がいいのではないかと考えています。同じパンフレットを配るにしても、複数の部署が全員で配る、渡して歩くというのはどうかなと思っています。

菅谷市長

教育部長。責任者ではないですが、これはどうでしょうか。

矢久保教育部長

これは大変な問題だと思いました。まず、3時間以上使っている子どもはおそらく目にも脳にも影響があるということでしたので、もう野放しにはできない状態だと思います。先ほど先生にお聞きしましたら、かなり健診も大変だということですが、松本にも人数は少なくとも実際に何人もそういう子がいることをきちんと目に見えるようにし、本気になるような形で進めていく必要があると思います。

それから、さらに根本的な問題でいうと、使わない場所や時間をきちんと規制しなければなりませんし、また外遊びが大事だというお話だったので、「外で遊びましょう」といったことやそれに代わることも一緒にやっていかなければならないと思いました。

啓発しやすい資料のようなものを作るということも一つですが、きちんと鈴木先生の他にもお話できるような語り部を作っていかななくてはならないと思いました。

菅谷市長 そろそろ時間となりますので、鈴木先生から最後にコメント、あるいはアドバイスをいただけるとありがたいと思います。お願いします。

鈴木武敏先生 実は、保育園のお母さんへの啓発がとても効果があるようです。実は奥州市で、個人で8ページのカラーの漫画を過去に10年間配りました。いろいろな病気について、例えば、タレントさんや女優さんで乳がんになり若くして子宮がんになったという話と、それに合わせた記事を載せて配布したところ、相当効果がありました。医師会と学校保健会は何をしているのかと言いたくなります。学校保健会は子どもたちにそういった資料をきちんと作って配ればいいのではないかと考えています。それから、私は親に教えてもしょうがないので、30年待とうと思っています。そうすれば必ず正しい知識をもった子どもを育てることができます。正しい知識を持った子どもが大人になってもらうようなやり方をしなければいつまでこの状態だと思いますので、そういったものを配れる機会があったらいいなと思います。個人の予算でやっていましたが年間数百万円かかるため本来ならば学校保健会などが作れば安くていいと思います。ですので、多くの先生方が学校保健会や医師会の学校保健の理事に言っていただいて、さまざまところから声が出てくれば変わるのではないのでしょうか。私が作った小雑誌は『ホスピタドクターニュース』というものですが、すごく評判が良いです。奥州市では資格がない眼鏡店に行ってはいけないということを常識として知っています。

菅谷市長 それは厳しいですね。

鈴木武敏先生 なぜいけないのか理由を言えばなるほどと言ってくれます。弱視の治療もうまくいっているのはそのためです。奥州市では95%治せる状況にま

できています。奥州市では、3歳児健診でひっかかると保健師さんが「あそこに行ってください、そうでないと見てもらえませんから」と言います。今、3歳児健診はどこでもいいとなっているのですが、眼科の先生で3歳の屈折矯正を見ることができる人はほとんどいません。この点は眼科医も変わらなければならないと思います。

けれども、また小雑誌は復活したいと思っています。私のホームページに全部載せていますが、小児科学会の先生は「一人でこんなことやってたなんて」と、少し引いてしまうほど驚いています。ポスターも張れるようにかなりの枚数を持っています。それらを文化祭で使っていただければいいなと思っています。

菅谷市長 本当はもっと増やしていただかないと困るので、ぜひ、第2、第3の鈴木先生を作っていただきたいと思います。

それでは、全体を通して何かありますでしょうか。

花村委員 一言だけ。鈴木先生がおっしゃった3歳が目処だというのは本当にそう思います。3歳児のときのチャンスを逃さずに、今先生のおっしゃったようなことを考えながら健診を進めていければと思います。

菅谷市長 相談体制はできますか。

花村委員 できると思いますよ。

菅谷市長 分かりました。それでは、大体予定の時間になりました。予定してありました議事は全て終了しました。

それぞれに有意義なご意見をいただきありがとうございました。なお、本日の内容につきましては、事務局で議事録を作成しまして、速やかに公表していきたいと思いますので、こちらもよろしくお願いします。

それでは、事務局に進行をお返しします。

小林教育政策課長 ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、「平成30年度第2回松本市総合教育会議」を閉じます。

《閉会宣言》

教育政策課長

平成30年度第2回松本市総合教育会議を閉じる旨宣言した。

<午後4時30分閉会>

会議録調製職員

教育政策課教育政策担当係長

堀 敬子